

# 日野川の歴史

## 第2回 たたら製鉄と日野川

杉本 良巳さん（米子市歴史館運営委員長）

明治35年の山陰線日野川鉄橋の写真をみると、川床は土砂で埋めつくされ、広い川原が出現している。こうした状況は江戸時代から続く日野川の本風景であった。

日野川の上流には風化した花崗岩(まさ)の層があり、中に良質の砂鉄が含まれているため、まさを崩して鉄穴(かな)流しと呼ばれる方法で砂鉄を採取し、ふいごを使った「たたら製鉄」によって鉄鋼を生産していた。まさに含まれる砂鉄は土くれ1升到耳かき1杯といわれるほど少量のため大量のまさを崩す必要があった。

試算によれば元禄2年(1689)から大正9年(1920)までの231年間に2億5,000m<sup>3</sup>(神戸港人工島3つ分)の土砂が日野川から美保湾に流出したという。この土砂が日野川の川床を埋めつくし、洪水を引き起こし、人家・耕地に大きな被害をもたらした。藩の記録によれば享保4年(1731)に土砂が流入して耕作不能になった田の石高が6,596石分あり、さらに天明6年(1786)には3万8,062石と増加した。1石は米俵2.5俵であるから仮りに1反当たり4俵とすれば2万3,788.75反となり、約2,379町歩が潰れ田となったことになる。

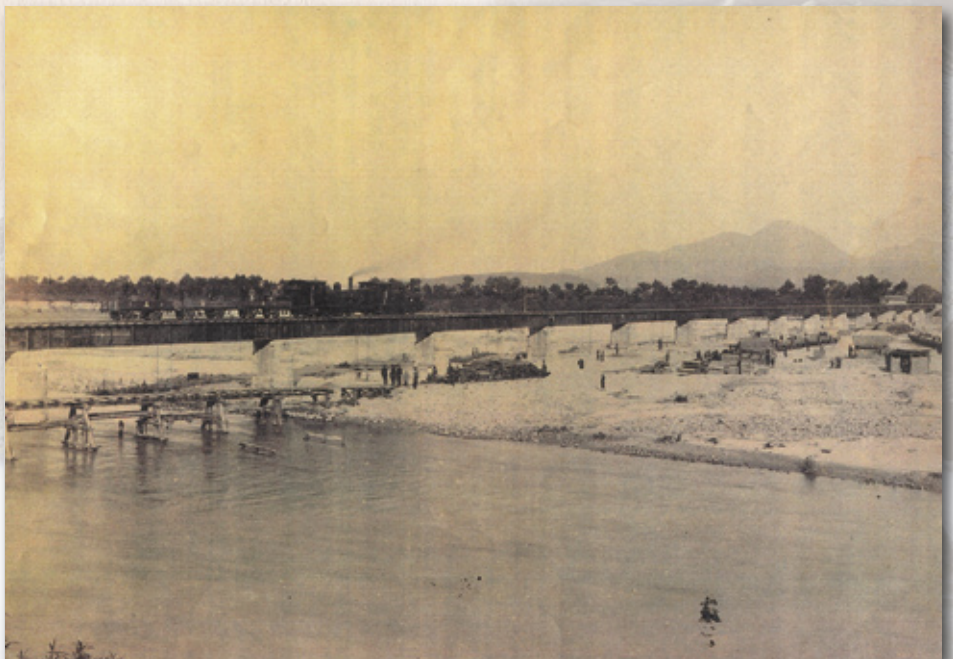
特に被害の大きい会見郡は藩に働きかけ、鉄穴流しによる土砂の撤去を製鉄業者に負担させたりもしたが焼け石に水であった。日野郡の製鉄業は郡民の経済と深く結びついていて、砂鉄の採取を止めれば、「たたら」や大鍛冶は休業となり、鉄山で働く労働者に米を売りつけることができなくなる。奥日野は年貢米を藩倉に収めることが困難で、米を売却した代金を収める金納制になっていたため、「風が吹けば桶屋が儲かる」式の連鎖反応で、忽ち年貢は滞納し、さらに鉄山師からの運上金(営業税)も滞って藩財政を圧迫する。日野郡の農民にとっても藩にとっても砂鉄採取は止めることのできない存在であった。

明治26年(1893)10月、日野川が大氾濫したとき、米子町をはじめ日野川下流域の車尾・日吉津・小波・中間・今在家・上新印・古豊千・岸本・諸木・大殿・五千石・上安曇・兼久・西大谷・橋本など1町15村の有志が上京して政府に「たたら製鉄」の適当な処置について陳情した。それに対

して製鉄業者は「川床が高くなるのは大山の岩石崩壊こそが主たる原因である」と反論した。確かに江尾川・俣野川・大江川・別所川など大山系の川は大量の岩石を日野川に流出し、日野川の下流ではそれら安山岩系の石を堤防工事に使っていた。

ところで日野川の流出土砂はその原因が何れにあるにせよ、洪水の原因であることは間違いないが、流出土砂のプラス面も見逃せない。奈良時代に編さんされた『出雲国風土記』には、国引き神話で余りある土地を引いた綱が「夜見島」になったと書かれている。その島が日野川の流出土砂によって本土と繋がれ、弓形の美しい砂州が出現した。

室町時代の応永5年(1398)に編さんされた『大山寺縁起絵巻』には、その姿が描かれている。「弓ヶ浜」の誕生である。絵を見ると、弓ヶ浜は細っそりとしているが、たたら製鉄の最盛期である江戸から明治にかけての時代、大量の流出土砂によって皆生海岸は年々2~4mずつ沖合へと広がっていった。その広がりが止まり、逆に年毎に海岸の砂地が減少していったのは大正10年(1921)ごろからである。洋鉄に押されてたたら製鉄が中止になると、土砂の流出が激減して、皆生海岸は浸蝕に悩まされることになった。さらに第2次大戦後、防災を目的とした砂防ダムの建設が土砂の流出をくい止め、日野川下流の安全性は高まったが、逆に弓ヶ浜の海岸浸蝕は一層の緊急課題となってきている。



日野川鉄橋 明治35年